

# 最新事情

丘陵地を渡る風が清々しい  
玉川大学キャンパス



## 初年次教育で、入学時から卒業後の進路への動機付けを図る

# 玉川大学

(東京都町田市)

小原國芳によって創立され、調和ある人格を育成する「全人教育」を教育の理念としてきた玉川学園は、2009年で80周年を迎えた。その高等教育部門である玉川大学では、2005年に全学部で「初年次教育プログラム」を導入した。大学全入時代を迎え、さまざまな面で学生の意識付けを図ることは多くの大学で急務となっている。取り組みについてキャリアセンター就職支援課長の大槻利行氏に伺った。

### 全学部で初年次教育を実施

玉川大学は文・農・工・経営・教育・芸術・リベラルアーツの7学部を擁する総合大学だ。丘陵地の緑豊かなキャンパスでは、約7600名を超える学生たちが学んでいる。同学は、大学全体で見守る支援を掲げキャリア教育に力を入れており、担任教員による所属学部での指導とともに、キャリアセンターで細やかなキャリア・就職サポートを行っている。

「学生には、いざ社会に出て働くことをしっかりと見据え、大学生活を充実したものにしてもらいたい。本学では、大学での学習と社会人となるための動機付けを含んだ『初年次教育プ

ログラム』を全学部で必修とし、早期から意識の改革を促しています」と話すのは、キャリアセンター就職支援課長の大槻利行氏だ。

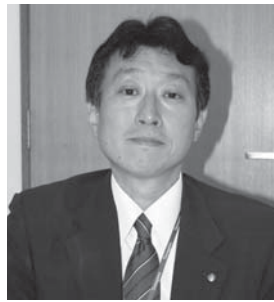
同学で初年次教育の導入を決めた背景には、少子化による大学全入時代の到来など、社会的な状況を背景とした学生の変化に対する教員たちの実感があつたという。皆が行くからという理由で進学するため将来の展望についての考えが深まっておらず、推薦入試などが増えたせいか、学力も一定ではないのだ。

「大学生というよりも、高校4年生」。彼らはそのままでは大学での学びのスタイルを習得できず、社会に接続していくのが難しい。もちろんそれは彼ら自身のせいだけではありません。学生が駄目だと嘆くのではなく、それならば今までにはなかった、根本的な意識づくりを促す教育が必要だろうということで、初年次教育のプログラムの導入に至ったのです。

大学で何のために、どのように学ぶのか。そのことを入学直後からしっかりと考え動機付けができるよう、同学では全学部を挙げて初年次教育に取り組み、「特色ある大学教育支援プログラム(特色GP)」にも採択された。1年生には「一年次セミナー101・102」を開講。週1回、担任教員が担当する。シラバスには、「なぜ大学で学ぶのか」「ノートの取り方」「読書の方法」「文章作成の方法」などと共に、「キャリアについて考える」「ボランティア活動」などの項目も見られる。これらの内容は、



キャリアセンターが主催する講座「社会人基礎力養成プログラム」では、コミュニケーションを取りながらグループで課題に取り組む



キャリアセンター就職支援課長の  
大槻利行氏

学部独自に工夫したりキャリアセンターなどと共同で行うこともある。

「受講した学生たちの中では『社会に出ることに対して、意識が変わった』という感想も多く見られました。実際に2年生対象に行うインターンシップガイダンスに積極的に出席する学生や、こちらから呼び掛ける前に自分からキャリアセンターに来て進路についての情報を集める学生も増えてきました」と大槻課長はその成果を語る。

現在は、「一年次セミナー」を受講した学生を対象に「二年次セミナー」のプログラムを導入した科目（全学共通選択科目）も開講



している。ここでは、「一年次セミナー」の発  
展科目として、自分の専攻している学問と社会  
とのかかわりや自己の価値観の探求などを通し  
て、社会人としての責任を自覚し、キャリアを  
考えることを目的としている。特にリベラル  
アーツ学部では、独自のプログラムを採ってお  
り、年4回、キャリアセンター職員が出向い  
て、先輩の進路や業種と職種などについて話を  
するという。

一方、こういった新しい取り組みをするため  
には、学生だけでなく、教員も変わらなければ  
いけないと同学では考えている。初年次教育な  
どの授業では、これまでのように教員が一方的  
に講義するような授業ではその目的を達するこ  
とはできない。学生自身が他者の意見を聞き、  
自らの意見を考え、さらにそれを他者に伝える  
ことが、学生個々の成長に繋がるのである。そ  
うした、いわば、学生中心の授業を取り入れる  
ため、FD (Faculty Development) にも力を  
入れている。協同学習やアクティブ・ラーニン  
グなどの新しい講義手法の指導法やカリキュ  
ラム・マップやシラバスの作成などのワーク  
ショップ、また、教員のキャリア・パスについ  
ての講演会など、年間10件以上の研修会を実施  
している。

## 時間のある学生のうちに 社会人の基礎を学ぶ

同学では、キャリアセンターが主催する資格

講座の一つとして、2007年から秘書検定を  
導入した。現在は春と秋の検定に合わせて年2  
回、2級対策講座を開講している。「社会の仕  
組みや基本的なルール、作法を学べる」と紹介  
したところ、回を追うごとに受講希望者が増え  
ているようだ。同学では以前にも秘書検定を実  
施していたが、その際は秘書を養成する目的で  
女子学生を対象とした講座だった。しかし、数  
年を経てあらためてその内容を見てみると、秘  
書に限らず一般の社会人にとって基礎となる内  
容を含んでいることに気付いたという。

「秘書検定の内容は学部や希望職種を問わず、  
全学生にとって必要な知識。社会との接点を持  
ち、社会人の基礎を身に付けるために有効だと思  
いました。就職活動で社会に出る前に学生の  
の皆さんにはぜひ学んでもらいたいです  
ね。」

大槻課長の印象では、世代間の常識のズレが  
特に顕著になってきたのは2005年あたりか  
ら。例えば「書類を封筒に入れて提出してくだ  
さい」と指示すると、A4の書類を幾重にも折  
り畳んで小さい封筒に入れてきたり、封筒に記  
名が無かったり、職員と学生との間で思い描い  
ているものが大きく食い違っていたりする。そ  
のような齟齬を大人は「若い者は非常識だ」と  
感じるのだが、「そうではない」と大槻課長。

「今の学生の多くは、社会や生活の変化から、  
従来は上の世代から自然と伝わっていたビジネ  
ス社会の常識に触れる機会が少なくなっていま

秘書検定講座。  
講師の喜多朋子先生の解説に熱心に聞き入る



す。彼らの多くは、そういう共通認識があることを知らないのです。以前は『常識』に反発して距離を取るといふタイプの反抗がありました。しかし昨今の学生は、驚くほど従順です。言われたらする。それでは何が原因かと考えてみると、やはり『知らない』ということが大きいように思います。非常識というよりは、無常識。彼らはただ『知らない』のであって、常識やマナーなど、必要なものと分かれば熱心に学ぼうとします」。

今年春の受講者は43名。男子学生も数名おり、全10回、17時から2時間の講座はこれまで一番の規模になった。正課の科目と時間がぶつかって受講できなかった学生などは「次はいつの開講ですか」と募集前からキャリアセン

ターに問い合わせに来るほどだ。

受講者は資格を取得し、就職活動の一環としてビジネスマナーを学びたいという3年生が中心だが、学年学部も異なる学生が皆、真剣な表情で講師の解説に耳を傾ける。過去に受講した学生たちからは、「社会に出てから必要なことがまとめて勉強できてためになった」と好評を得ているようだ。平成21年度の合格率は約80%と、全国平均を大きく上回った。

またキャリアセンターでは、独自のキャリア講座も開講している。その一つが「社会人基礎力養成プログラム」だ。さまざまな課題にグループで取り組むワークショップ形式で、問題解決やアサーショントレーニング（適切な自己主張トレーニング）など多様な取り組みを行う。1チーム8名、1クラス24〜30人程度で行うが、今年度は定員を大幅に上回る申し込みがあったという。

「学生たちも、コミュニケーションを取りながらチームで問題に取り組むという活動の必要性を感じているのでしょう。逆に言えば、そういう機会が今までなかったということかもしれません。携帯電話やインターネットなどの普及

で、一対一のダイレクトなコミュニケーションや、対立のないコミュニケーションは多くなったかもしれませんが、それだけではなく、新たな仲間を作ったり意見を戦わせながら課題に取り組んだりしたいという姿勢が出てきたのではないのでしょうか」。

### よりよい職業人生を送るためのサポートを

2009年度の玉川大学の就職率は、希望者の約94%。就職は本人だけでなく、保護者の関心も高い。首都圏だけでなく、新潟や静岡などへのUターン就職も多い玉川大学では、各地方で大学全体のキャリア支援の流れや今の就職状況などについて説明する機会を設けている。

大学を挙げてキャリア支援に力を入れている同大の、これからの課題は何だろうか。

「キャリアセンターの立場で言えば、まずは希望者の全員就職、そして早期離職への対策です。学生自身に、社会を見る目を養ってもらおうということも必要だと思います。内定をもらえればいいのではなく、職業生活のファーストステップを充実させ、できれば後輩も育てながら自分の仕事をしていく。あるいは万が一離職しても、社会状況や自分の力を自ら判断して動いていけるようになってほしい。初年次教育プログラムやキャリアセンターの講座で、こうした生き抜くための意識づくりをしていきたいですね」（大槻課長）。